

旗本夫人が見た江戸のたそがれ ～井関隆子のエスプリ日記～ 深沢秋男 著 文藝春秋 2007年

文化十一年(1814年)頃、納戸組頭の職にあった井関親興の後妻に入った井関隆子が記した日記から、当時の江戸の様子を読み解く。主婦の座も譲り、どうにも手持無沙汰で仕方がない、些細なことでも気になることは書きとめないとどうにもスッキリしないという気持ちから書き始めた日記には、世に出た優れた書物にはない”本音”の部分が見えて面白い。

江戸前で笑いたい ～志ん生からビートたけしへ～ 高田文夫 編 筑摩書房 1997年

「東京の笑いの原点は落語だ」。ということで笑いに造詣が深い放送作家高田文夫氏と、笑いに対してツウと呼ばれる文化人たちが、落語を中心に東京の喜劇人を振り返る。

シワの数だけ愛をこめて アーマ・ボンバック 著 主婦と生活社 1998年

全米で大人気のユーモアコラムニスト、アーマ・ボンバックが日常の身近な出来事をユーモアたっぷりに書き記した傑作選。アメリカと日本の生活習慣の違いから、ユーモアの伝わりにくい話も掲載されていますが、それでもついニヤニヤしてしまうので、周りに人がいないのを確認してから読むことをお勧めします。

あれもうふふこれもうふふ ～暮らしのなかの笑いさがし～ 伊奈かつぺい 著 草思社 2006年

マルチタレント伊奈かつぺい氏の自伝的笑いの哲学書。原点は20代からつけ始めた日記。その日記には天候だとか当たり前のことは書かず、その日にあった楽しいこと、面白いことだけを書く。もし楽しいことがなければ何か楽しいことを考えて・・・例えば、電話はあるが、かかってくるわけではない。ならばと自分の電話で自分の電話番号にダイヤルしてみる。当然話し中の音が鳴る。ずっと独りで、誰とも話をしていないはずなのに自分の電話はいつも話し中。いったい誰と話しているんだと想像し日記に書いてみる。と、ここまでするとやりすぎかもしれませんが、本書には「うふふ」となってしまうような出来事が満載です。

他に

書 名	著（編）者名	出版社	出版年
落語にみる江戸の食文化	旅の文化研究所	河出書房新社	2000
天皇家のユーモア	「女性自身」皇室取材班	光文社	2000
癒しのユーモア	柏木哲夫	三輪書店	2001
漱石のユーモア	張 建明	講談社	2001
泣いて笑って遺言川柳	UFJ信託銀行	幻冬舎	2004
文芸漫談	いとうせいこう/奥泉光/渡部直己	集英社	2005

などなど

